

漢籍の古點本に用ゐられた濁音符

——特に博士家に於ける使分けについて——

小 林 芳 規

1 は し が き

漢籍の訓讀法は、平安時代における博士家の家學成立に伴つて、同一内容の漢籍でも各家毎に訓讀法を異にしてゐたばかりでなく、諸種の漢籍を通じて、各家毎に一定の訓讀法を持つてゐた。此の事は、平安時代鎌倉時代加點の訓點資料で現存する漢籍を調査し整理する事によつて、次第に判明して來た所で、その3、4の漢籍等については既に報告して來た。所が、此の各家間の相違は、訓讀法ばかりでなく、表記上濁音符の上にも認められる事が判明した。^①従來、博士家の家間の相違は、表記上ヲコト點の點法についてそれが紀傳點を用ゐてゐるか、或いは明經點を用ゐてゐるかに重點が置かれた。しかし、ヲコト點のみに依る限りでは共に紀傳道に屬する各家間の相違とか明經道に屬する二家間の相違とかは不明瞭であるし、又ヲコト點を用ゐない假名のみの漢籍については無識語の場合は全く系統が不明のままであつた。しかるに、之に、博士家間において濁音符が區別して使分けられた事實を勘案する事によつて、我々は表記上からも、一見して、その資料の系統—いかなる家柄の資料であるかを察知する事が出来る。しかも、濁音符に基く表記上の識別は、更に訓讀語法の上の相違に基いて得た系統と相俟つて、當該資料の系統を知る事になるのである。

濁音符そのものの成立・古寫本における使用事情については、既に吉澤義則博士・橋本進吉博士・星加宗一氏・春日政治博士に依つて論ぜられ、又、最近では築島裕博士の詳細な調査がある。しかし、これらの高説は平安時代を主とされたもので、しかも、博士家内部における濁音符の使分けの事實には全く觸れ

てをられない。博士家間における訓讀法の相違の實態究明を目下の課題とする筆者には、従つて、此の事實は見逃す事の出来ない重要な事柄である爲に、調査資料を整理して得た結果を報告して大方の御叱正を仰ぎたいと考へる次第である。

漢籍の點本には、濁音符として、「oo」又は「o・o」が用ゐられてゐる。「oo」又は「o」は漢字の四聲或いは六聲を示す位置に附して、その漢字音が濁音を持つ事を示す。個々の例示に當つては、此等の符號を附した漢字音が濁音である事の検討の過程をも一々明示すべきであるが、本稿では煩を避けて省略した。「oo」は親鸞上人の如く之を濁音符とは異なつた音符として用ゐる事もあつたからであるが、漢籍においては全て濁音符に用ゐ、しかも、「oo」と「o」^③とが家の相違に依つて使分けられたのである。

2 時賢書寫本白氏文集正中二年點における使分け

書陵部藏白氏文集卷三(新樂府上)一軸は、その識語に、

元亨四年(1324)十月一日以菅家證本書寫訖

侍従時賢

(別筆)

正中二年(1325)三月十二日拭老眼移點畢

從二位濟氏

とある訓點資料で、之に依つて、本文を菅原家の證本を以て侍従時賢が元亨四年に書寫した本に、その父濟氏が翌年に、同家の訓點を移點したものである事が判明する。菅原家證本とは、右の識語の前に存する本奥に依つて、菅原爲長が侍讀に用ゐた本である事が知られる。此の點本の本文には全卷に墨訓と朱のヲト點が施されてあるが、之が右の識語で菅原爲長の訓點であると判る。所が、墨訓とは別に、全卷に互つて朱筆の假名訓も施されてゐる。此の朱筆の訓法の素姓は、右掲の識語に續く、

以式部大輔正家朝臣侍讀本見合了彼點以朱寫之 (朱)「校了」

とある識語から、藤原正家の訓法をも異説として別に書入れたものである事が

判明する。識語は之に續いて、正家の本奥書を載せてをり、校合に用ゐた本が藤原日野流の學者が代々侍讀に用ゐた當家の證本である事を示してゐる。(本資料の識語の全文については、吉澤義則博士「王朝時代に於ける博士家使用ヲコト點譜」(國語説鈴 所収) 参照)

さて、此の書陵部藏白氏文集卷三の訓點には、漢字音の濁音である事を示す爲に、濁音符が用ゐられ、その例が多い。所が、濁音符に二種の形式、「oo」と「o」とが認められ、しかも両者が正しく色分けされてあるのである。即ち、

oo——墨色(墨訓と同筆)

o——朱色(朱訓と同筆)

であつて、例外なく區別して用ゐてゐる。

「oo」(全て墨筆)の例

oo賣—炭—翁 oo隋—堤—柳 白—oo鬚 oo魏—敵 大^{oo}廟 oo服スレは
上 oo元 玄 oo元 笙 oo歌 任^{oo}スル青 oo苗 oo廟—oo謀 感—悟^{oo}
oo吳—興—山 建 oo牙 左—oo衽^{oo} 六萬^{oo} 西—oo洱—oo河 oo磨—^{oo}些^{oo}
天—oo顔 oo冤—疏

「o」(全て朱筆)の例

o雅樂— 牡^o—丹—芳 義^o 思^o—^o摩 開—^o元 —^o牙—^o曠 —^o貞
—^o觀

右が全例である。此を識語に言ふ墨訓と朱訓との區別に引合せると、

oo (墨筆) ——菅原(爲長)家點本所用

o (朱筆) ——藤原(日野)家點本所用

であつた事が判明するのである。

次に、時賢書寫本文集には、墨筆訓・朱筆訓とは別に、黄筆による假名訓をも載せてある。此の黄筆の訓法は、同じく黄筆で「江」と注記してある事や、新樂府の他の點本に注記してある「大江家訓」と一致する事から、大江家の文集の訓法の中、菅原家や藤原日野流とは異なつた訓法を併記したものと考へられる。此の黄筆でも濁音符が用ゐられてゐて、

① 擊^o—壞 (「o」は黄筆)

そこでは「o」を使用してゐる。さすれば、大江家點本でも、濁音符に「o」

を用ゐた可能性が大きい。

⑤

3 紀傳道の諸家における濁音符使用状態

鎌倉時代以前においては、紀傳道所屬の各家の訓讀法を知る訓點資料が幾つか現存してゐるので、之に據つて、各家間の訓讀態度の相違を濁音符についても知る事が出来る。

菅原家の訓讀態度を知る訓點資料は、

- A 識語に菅原家の學者の訓點である事を明示した資料……六點
- B 他家の訓點資料中に、菅説が併記されたもの……五點
- C 識語等を闕くが、訓讀法が菅原家の特徴を持つ爲に、菅原家資料と推定したもの……五點

が挙げられる。此の中、BCは、後に觸れる事として、Aに限つて濁音符を見るに、現存本は、何れも少くとも一回以上の轉寫を経たものである。就中、九條本文選卷廿、卷十七や大東急記念文庫藏和漢朗詠集卷下嘉曆點・金澤文庫本文集の如く、菅家の點本を、藤原家等他家の者が移點した資料や帝王略論の如く、識語には見えなくても内容上他家學者移點の形跡の窺はれる資料は、濁音符の如き表記符號考察の際には除外する必要がある。結局、殘る二點、前掲の時賢書寫本文集と、知恩院藏黃石公三略とが、此の際の資料となる。

知恩院藏黃石公三略も、菅原家の證本を良祐が「正和二年(1313)卯月八日點之早」した移點本であつて、本奥には次の如くある。

建保二年(1214)三月一日以菅氏證本書寫畢 隆慶

本云」應德元年(1084)二月廿日以證本書寫畢式部少輔菅荆

本云」寛弘八年(1011)三月廿日撫白頭之雙鬢點黃石之三略畢矣 右少辨

菅宜義

此の點本における濁音符は、

無_レ書^{〇〇}(中略)

の如く「〇〇」を用ゐてゐる。凡そ、博士家の點本を僧が移點する際に、濁音符について親本が「〇〇」使用の場合には、その移點本でも「〇〇」を用ゐるのが一

般であつた(後述)から、右も、親本の菅原家點本で「oo」を用ゐたと考へられる。さすれば、先の時賢書寫本文集における、菅原家訓に「oo」(墨筆)を用ゐてゐた事と併せて、菅原家では濁音符に「oo」を用ゐたと考へられて來る。

藤原式家の訓點資料の中、識語に式家の學者の訓點である事を明示し、しかも他家學者の轉寫を經ない資料としては、九條家本文選の中の、卷一・卷二・卷三・卷四・卷七・卷八・卷十・卷十一・卷十二・卷十三・卷十五・卷十六・卷十八の十三軸がある。識語によれば、此の十三軸は藤原式家の師英が、正慶元年・二年及び十年後の康永二年(卷十八のみ)に、書寫加點したものによつてゐる。例へば、師英の識語は、

(卷一奥) 正慶二年(1333)二月十四日書寫了散位藤原師英

翌朝寫朱墨兩點掛物了 師英

(卷十八奥) 本云康永二年六月十九日拭細汗點抄書了 前但州刺史師英

同七月廿三日於三條坊御學問所寫了 師英

同廿七日朱點了 師英

の如くで、本奥によれば、父長英や、相房等式家の訓説を傳へたものである。

その卷一の濁音符を見ると、次の如く全て「o」のみである。

楚一望^o 清一潤^o 一^o眇一焉 飛一^o。文 潤^o。一色 遺一美^o 絨^o 冕^o
虹^o。霓 逆^o。詭^o。一遇^o 僂^o。休 玩^o。一^o好。

卷二以下も同じく「o」を用ゐてゐる。(例抄出)

貳^o。一轄(卷二) 一^o。矛鋌(卷三) 海一外^o。(卷四) 繁一鷲^o(卷七)

鷓鴣^o。(卷八) 一^o。噴一。岨(卷十) 寂一漠^o。(卷十一) 恭一默^o。(卷十二)

軟^o。一弱。(卷十三) 一^o。柩(卷十五) 没^o。(卷十六) 茗一邈^o。

(卷十八)

右によれば、式家では「o」を用ゐたと考へられる。

藤原内磨流の日野家の訓點資料は、現存するものが少いが、前掲の、時賢書寫本文集の朱筆の假名訓は、日野家の訓説を傳へたもので、そこでは濁音符に「o」を用ゐてゐた。外に日野家の濁音符使用状態を考へる資料としては、室

町時代の移點資料になるが、書陵部藏後漢書三十五冊がある。大永二年(1521)及び享祿四年(1531)都督郎の移點であるが、その親本は、平安・鎌倉時代に於ける正家以下日野家の學者の訓説を傳へるものである。

(第三冊奥)

本云合家正本、説々勤物悉書移了

奥書云以家説授孫顯業了_李御判(正家)

以此書侍讀_李御判

受家説了、俊信長嫡孫藤安

菅説抄 注載了少字 合摺本了才字

以此本奉授天子訖 右少辨藤俊國

そこにも、

方望^〇(帝紀一)

の如く「〇」を用ゐてゐるのは、時賢書寫本文集の朱筆の濁音符と一致し、日野家の濁音符の一を知る事が出来る。

藤原南家の濁音符使用状態を直接に示す資料は管見に入らないが、南家本貞觀政要に基き、他家の濁音符を參勘する事により、推定する事が出来る。書陵部藏貞觀政要卷一の一軸(僚卷の卷二~卷十は穗久遜文庫藏)は、鎌倉時代に、南家相傳の秘本を書寫したもので、識語によると、

本云 安元三年二月五日 奉授主上既訖

正三位行宮内卿兼式部大輔播磨權守藤原朝臣永範

永久二年仲春廿五日 點訖 良兼

合證本等又加自點早秘本也 永範

(以下南家の孝範・經範・明範に傳授の記事あり次に終る)

建長六年三月廿日 以家説授少男淳範既訖 三品吏部大卿經範

の如くその事を物語つてゐる。所がこの南家本に、永仁二年に別に菅家本で異説を移點校合してゐる事が、卷末裏書の奥書で知られる。

此本ハ南家之點本也奥書如表而永仁二年八月晦日」以菅家本朱點并墨點寫之於菅點者合短點」早能々可分別也又上注者是南家之注也」菅點本奥書云讀

合了 審證」

建仁元年四月廿一日酉斜書寫了

同廿五日巳時移點校合了 知家

(以下、菅原家の爲長、在宗等の奉授の識語あり)

右奥書菅師匠證本如此以彼秘本重移」點校合了 于時建治第一之曆初冬上旬之」候於燭下所終功也 治部權少輔平朝臣兼俊

菅家の證本を以て二度の校合を加へてゐる。全卷に存する合點(短點)付の異訓は、本の訓に對して訓讀語が、菅原家の訓法(南家の訓讀法に對する)に合ふ。従つて訓讀法の上からも右の識語を確認する事が出来る。所で、本資料の濁音符を見ると、

コムホウニシ サム ホウニシテ クエム カク ケフ クキ ヒ リヤク
。昏暴^〇。殘一暴^〇。元^〇首 學。一業。鬼一魅^〇 互^〇一蹀。月。
一令。儒一學。

の「〇」の符號と、

〇耳一目 〇〇詔一勅。〇〇仁 〇〇靡一麗 骨肉。〇不^フ。〇言^{ニシテ} 贈^{ソウ}〇一遺^〇

の「〇〇」の符号との二形が全卷に用ゐられてゐる。所が、仔細に見ると、「〇〇」は後から加筆の方に見られる様であり、又

アリ ソウ スル
有 贈^{ソウ}〇一遺^{スル} (尾題から卷頭に向つて十三行目)

では、「贈一遺」の和訓と「贈一遺」の字音との二説があり、字音の方に合點があり、「スル」の假名は「ヲクル」よりも右寄の野線の上に書かれてゐる事から、「贈〇一遺スル」といふ字音の讀みは後から加へられたもので、菅原家の訓法である事が知られる。その字音讀みの「贈」に「〇〇」が施されてあるのは、「〇〇」が同じく後の加筆の菅家所用の濁音符であつた事が判明する。既述の如く菅原家の濁音符は「〇〇」であつたから、此の資料の濁音符「〇〇」「〇」の二形式の中の「〇〇」は菅家の符號が後の加筆の際に用ゐられたと見られる。さすれば、殘る「〇」は、元の南家所用の符號と考へられて來るのである。尚、貞觀政要の外に、九條家本文選卷廿三は識語によれば、南家の「諸範」の點を傳へたものと知られるが、此の一軸は、和訓を主とした加點で、漢字音を示す疑點を一切用ゐてゐないから、濁音符の形式を知る事が出来ないのは惜しまれ

二152) 如^シ。磨^{ハスルカ}(卷三90) 。。微^ヒ(卷三395) 。。禪^シ—。擲^ヒ—。明^{セウ}(卷五21) 繞^{セウ}°—。角^{カク}
 (卷五170) 陸^{リク}。。(卷六100) 妻^シ 。。柔^{ジュ}(卷六373) 戎^{ジュ}°—。衣^イ(卷七507) 馭^{キョ}°°
 (卷八19) 才^{サイ}—。藝^イ°°(卷八28) 殘^{ゼン}—。暴^{ボウ}°°—。之^シ人^{ニョウ}(卷九362) 任^{ゼン}°°(卷九496) 獄^{キョク}—
 犴^{カン}°°(卷十23) 王^{ワン}—。言^{ゴン}(卷十35) 。。

金澤文庫本春秋經傳集解三十軸は、清原頼業の樹立した訓説を、その孫に當る教隆が傳へた本により、教隆の子直隆・俊隆等の將軍に奉授したものである。此の事は詳細な識語によつて明らかである。(識語については「圖書寮」濁音符は全卷全て「°°」のみである。(例抄出)

。。媒^{ハイ}—。介^ケ(卷二) 。。仍^{シヨウ}—。叔^{シヨウ}。(卷二) 親^{ケイ}—。迎^{ケイ}°°(卷三) 樂^{カク}。。—。安^{アン}(卷三) 孟^{メイ}°°
 一。。任^{ゼン}(卷三) 六^{ロク}—。鵠^{カク}。。(卷六) 公^{コウ}—。子^シ 。。賣^{バイ}(卷七) 。。撓^{ダウ}—。敗^{バイ}(卷十二)

大東急記念文庫藏論語(何宴集解)十帖は、卷一より卷六までが明經博士清原頼元が建武四年(1337)に加點し、卷七より卷十まではその甥良兼(眞性)が康永元年(1342)に、それぞれ清原家説を以て加點し飯尾左金吾に授けた由の識語を持つ。その訓法は他の清家の論語の訓法と良く合ひ、清家の訓説である事が判る。これも濁音符は全て「°°」を用ゐる。(例抄出)

⑧ °°怒也 。。輓^{ワン}(卷一) 捐^{ケン}—。讓^{ジャン}°° 訥^{ネツ}。。(卷二) °°冉子 。。儒^{ニョ}(卷三) 任^{ゼン}°°
 (卷四) 道^{ダウ}—。藝^イ°° 吳^ウ°° 卓^{タク}—。爾^{ニョ}°°(卷五) 。。羿^{ケイ}°°(卷七) 宗廟之 °°美^{メイ}
 (卷十)

書陵部藏古文孝經永仁七年點一軸は、書博士清原教有が清原家の秘説により朱點を他人に依頼し墨點を自ら加點した由の識語がある。その濁音符も亦「°°」のみである。(例抄出)

。。顔^{ガン}—。回^{ケイ} 自 °°然 °°吟^{イン}—。動^{ドウ} °°仁義°° 大^{ダイ}°—。°°雅 °°四^シ—。嶽 °° 和 °°
 睦 °° 赫 °°—。赫 °° 潤 °°—。澤^{カク} °° 樂 °°。

次掲の漢籍訓點資料は、何れも清原家の學者の加點に成るもので、そこでは濁音符は全て「°°」のみを用ゐてゐる。

○神宮徴古館藏古文尚書

十三軸の中、卷一・二・五・六・七・八・九・十・十一(卷首)・十二(卷首闕)・十三

(卷二奥) 本奥云文永三年南呂廿日唯課 微功 畢終 校點而已 明經得業生
清原真人教有在判

正和^⑦第二曆 (1313) 孟春廿二日以相傳之說授申生徳少人既訖 明經
得業生清原長隆

○書陵部藏古文孝經 一軸

(奥) 元亨元年 (1321) 十一月廿一日以累家秘說奉授式部大夫殿畢 散
位良枝

○天理圖書館藏古文孝經 一軸

(奥) 正安四年 (1302) 八月五日以家說授申了 直學士清原 (花押)

○東洋文庫藏論語集解 十帖

(卷一奥書) (前略)

(本奥云) 弘安六年三月廿四日以九代之秘說授愚息教元了 散位在判
正和四年六月七日書寫了

(別墨)

正慶二年閏二月廿一日朱墨校點了

此等によつて、清原家では濁音符に「^o」を用ゐてゐた事が判明する。
中原家の訓讀法を窺ふ點本で現存するものは、清原家の資料に比較して極めて少い。その中、識語に中原家の學者加點の記事を持つ資料は、高山寺藏論語
嘉元點二軸 (卷四、卷八)、醍醐寺及び東洋文庫藏論語文永點 (卷七及び卷八) 計
二軸、大東急記念文庫及び觀智院藏古文尚書 (卷十三及び卷十一) 計二軸、東洋文
庫藏古文尚書卷六・元徳二年點が管見に入ったものである。此の中、最後の古
文尚書元徳二年點は、中原康隆の書寫加點とその後中原重貞・重隆・康富の談
義了の識語があるが此等の人々は、清原家に受學した人々であるらしいとい
ふ。訓讀法も神宮徴古館藏の清原家のそれと一致し、ヲコト點法も清家所用の
⑦ 明經點で、濁音符も「^o」であるから、除外する。

大東急記念文庫藏古文尚書卷十三は、識語によると、中原家の秘本を移點し
たとある。

(卷十三奥) 元亨三年 (1321) 十一月廿一日以秘本 (「以秘本」の三
字は右傍補入) 書寫之 馳

愚筆了

「移點早」「重校了」

長頼

本云 建長四年 (1252) 六月九日以家説奉授一條中納言家了 助教中原師弘

(以下、師弘・師種の奉授の識語が續く)

(「元亨三年」の識語の上方に次の識語がある)

凡十三卷之内十一卷者自筆書改了、二卷へ不朽損之間用之了七卷へ或僧

馳了 代々相 (傳ハ) 本大略朽損之間所書改之 二卷合秘本處無相違也

此の本の濁音符には、

机^{oo}一隍^o (「oo」「o」は墨筆)

任^o一用 (「o」は朱筆)

の兩形が見られる。凡そ此の本には、二通のヲコト點及び假名が加點されてあつて、ヲコト點は一が明經點、他は紀傳點である。經書に明經點を用ゐるのは清原家で、中原家では紀傳點を用ゐる。さすれば、識語に言ふ中原點とは別に清原家の訓法が混在してゐる事になる。本文中に見える、

有^{家本无 或家本有}ハ 伎一藝

の注記は本文に他家の説を校合した證である。ヲコト點から考へて、清家の説が交つてゐるとすれば、濁音符に「oo」の存するのはその爲と解されると共に、残る「o」は、紀傳點所用の中原家の用ゐた濁音符と考へられて來るのである。

高山寺藏論語二軸は、

(卷四奥)

(本云) 寛元々年 (1243) 九月三日以累祖之秘説奉授相公衛將軍尊闇畢 大學權助中原師有

安貞二年六月十五日以直講師行家之本書寫了 合證本畢

嘉元々年 (1303) 九月廿五日於中御門京極令書寫了 大法師了尊 (花押)

點交了

の識語の如く、中原家の秘説を了尊が移點したものである。濁音符を見ると、「oo」と「o」との二形が見られる。但し「oo」が多く用ゐられてゐる。

^{ホウ}暴^{マン}○ 慢 (卷八)
^{シウ}柔^{シユン}○ 順。周^シ○ 任 (卷四)
^{セウ}韶^{セン}○ 樂。善^ニ○ 人。言^{キヨ}○ 語。文^{ヘフ}一莫 (卷八)

之も大法師了尊の轉寫を経てゐるが、親本が「○」使用の本を僧侶が移點する時は、「○○」「○」とが混在するのが一般である事(後述)から考へて、右の論語嘉元々年點の親本たる中原家點本では、濁音符に「○」を用ゐたであらうと推定される。

論語文永點卷七・卷八も識語に中原家の學者の加點の記事がある。

(醍醐寺藏卷七奥)

文永五年(1268) 閏正月六日書寫之早(花押)

五月七日移點了

同七年後九月二日重見合之移勘物等了

(別筆)

文永七年十二月十三日以累家之說奉授三品羽林尊閔早 主殿權助中原師秀

文永七年十二月廿八日以累家之說奉授三品羽林尊閔了 主殿權助中原師秀

濁音符の使用例は少いが、此の資料では「○○」を用ゐてゐる。

○○壤 懃問○○ 暮○○ 苞一○○ 茅○○ 衽(卷七) ○○蠻一狢。○○柔一順○○
 ○○如之○○ 何。周○ 任○○ 陪一臣(卷八)

「○」を見ない事が前掲二資料と異なる。ヲコト點は紀傳點系である。所が仔細に見ると、本文中に、

○家本无
孔子對曰(卷七)

○家本有
無禮義之處之(卷七)

止 家本无
告使君(卷七)

醍醐本
梔也(卷八)

「家本无」等の注記が存する。これは本文に中原家以外の家の本文を採用した證と考へられる。さすれば、その際、その家所用の濁音符まで轉寫する可能性

があるから、此によつて、中原家の濁音符を「oo」と斷ずる事は出来ない。

以上の如く見ると、中原家の濁音符には「o-」を用ゐたと推定する事が出来る。(但し、「oo」と交用したのか、「o-」だけであつたのかは、現存資料からは不明である)

尚、紀傳道・明經道所屬の如上の諸家の外に、三善・橘・巨勢・賀陽家等の名と訓説が訓點資料に残存するが、それらの濁音符は知る事が出来ない。恐らく此の諸家の點本には未だ濁音符は成立してゐなかつたらうと考へられるから、此の點からも論外となる。又丹波家の點本にも濁音符を見る事が出来なかつた。

5 「oo」と「o-」との交用資料について

漢籍の訓點資料の中には、同一資料において濁音符に「oo」と「o-」との兩形式を交へ用ゐた資料がある。その理由には二通の解釋が考へられる。

(一) 博士家の中に、「oo」と「o-」とを交用する態度の家があつた爲であるとする解釋

(二) 「oo」のみを用ゐる家の訓説と「o-」を用ゐる家の訓説とが、一書中に取入れられた爲に交用したとする解釋

である。前節までに見た如く、轉寫を経ない資料では、全て「oo」か「o-」かの一方のみである事實は、交用の理由が、(二)である事を豫測させる。凡そ、「oo」と「o-」とを交用する場合には、

(1) 「oo」と「o-」とを色分けその他で區別し、しかもそれぞれの素姓が識語から判明するもの

(2) 「oo」と「o-」とを色分けその他で區別するが、その中の一方の素姓しか識語で判明しないもの

(3) 「oo」と「o-」との區別がし難いもの

の三種が實際の資料に存する。右の中、(1)は、時賢書寫本文集と書陵部藏貞觀政要卷一南家本とが此で、その色分け等と識語とが博士家間濁音符の相違を知るのに却つて好都合であり、就中、時賢書寫本文集が本稿の出發點であつた事

は、既述の如くである。そこで、此の節では、(2)(3)について考へる。

(2)には、九條本文選卷二十がある。此の卷二十には濁音符に「ㄱ」と「〇〇」
とが用ゐられてゐる。所が「〇〇」は、寫眞によると、全て淡い色で、(恐らく朱筆)
「ㄱ」とは區別されてゐる。

「ㄱ」の例

^{クワン}玩^ㄱ—^ㄱ好^〇。覺^ㄱ—^〇寤^〇。驕^ㄱ—^〇傲^〇。勝^ㄱ—^〇母^〇。磨^ㄱ—^〇碧^〇。米^ㄱ—^〇撫^〇
^{ヤフス}
—^〇養

「〇〇」の例 (淡い色)

^{ヨウ}蠅^{〇〇}—^{〇〇}蝻^{〇〇} (「〇〇」は去聲・入聲共に淡色)

^{フソク}〇〇^〇晚^{〇〇} (「〇〇」と左傍の「ハンニ」とは共に淡色)

^{ラル、ラ}任^{〇〇} (「〇〇」と左傍「シムセルラ」とは共に淡色)

小^{〇〇}—^{〇〇}讓^{〇〇} (「〇〇」と左傍「シヤウスルナラムヤ」とは共に淡色)

假名にも淡色があり、太く大き目の假名で異訓を示してゐる。此の淡色の訓を
天理圖書館藏五臣註文選卷二十院政初期點(訓讀法より調べて菅原家の訓法)と比較
すると、院政初期點は、九條本の淡色の假名訓と殆ど一致する。

九條本

^ミ自^{ヘネテ}—^〇到^{ケイシテ} (音合符と「ケイシテ」は淡色)

^{カ、ラムヤ}聚^{カ、ヘレムヤ} (「カ、ラムヤ」は淡色)

^{シナム}猶^〇知^{シレリ} (「シレリ」は淡色)

^{カテノ}饑^〇道^{カレイヒヨクル} (「カレイヒヨクル」は淡色)

天理圖書館藏本

自^〇—^〇到^{シテ}

聚^{カ、ラム(ヤ)}

猶^〇知^{レリ}

饑^〇道^{オクル}

従つて、九條本文選卷二十の訓の中、淡色が菅原家訓法と考へられ、それに
「〇〇」が用ゐられるのは首肯出来る。所で九條本文選卷二十の識語は、

承安二年壬辰閏十二月廿一日以菅給新家本寫點了 安紀宗光
生年十八

とあり、菅家本の寫點とあるが、それは異訓の方を指すかと考へられて來るの
である。

(3)「〇〇」と「ㄱ」との區別が難しい資料

此の種の資料には、種々の場合があるが、何れも「^〇」を用ゐた系統と「^〇」を用ゐた系統との交用に據つて生じたものである。

○醍醐寺藏遊仙窟康永三年點

濁音符に「^〇」と「^〇」とがある。識語によれば法印權大僧都宗算の模寫になり、その本は「江中納言維時卿」の點と言ふ。眞偽はともかく、訓法には部分的に大江家の訓法を傳へてゐる。所が別に菅原家の訓説を所々に併記してゐる事が「菅」の注記で判る。従つて「^〇」と「^〇」との交用には、右の二家の訓説が交つてゐる事に基く公算が大きい。

○斯道文庫藏帝範應安元年(1368)點

少陽之任^〇 逆^〇。節 魏^〇^〇武 牧^〇。一野
ホウ キヤク 暴^〇。虐^〇。榮辱^〇。柔^〇。興^〇。亡^〇 善^〇。途
キョウ ヘウ ト

濁音符に兩形式が交用されてゐる。奥書は、

應安元年十一月四日 良賢

とあるが、良賢は清家のそれに合はず、不明である。訓讀法から見て僧侶の移點と考へられる節がある。卷頭に「敦基本」とある事から、式家の訓法を持つてゐる事が知られ、又別に「菅二品本」に據る校合をも加へてゐる。さすれば、此にも濁音符において二系統の形式が交用された公算がある。

○古文孝經で「^〇」を交へる資料

古文孝經の諸點本の中、「^〇」をも交へる資料は次のものである。

□猿投神社藏古文孝經一帖

(奥書) 書本云承安四年甲午正月上旬肥州二千石令授于予畢 卽以清家之證本所寫取也此本者師匠御手跡也 契眞法師記之建久六年乙卯三月廿六日美州遠山之莊飯高寺書寫了

□三千院藏古文孝經一軸

(奥書) 建治三年八月 日依垂髮御詠如形染筆畢 本自書生不堪之間於字
紙繆濟々歟尤不便 右筆山王院
門葉 寂空

金王曆之

同九月上旬交點之書本之點不一途頗可謂狼藉本歟仍以證本移點畢

金王丸重記之

點本記云建保五年孟夏上旬之比以主水正清原賴尚眞人本書寫移點了
賴業良業等以此本爲相傳本尤可秘藏者也云々

已上

□大東急記念文庫藏古文孝經 一軸

(奥書) 正應六年五月廿五日書寫之

(「ㄨ」に加筆して「ㄨ」とする例が目立つ)

□書陵部藏古文孝經 一軸

(奥書) 元徳二年五月二日書寫畢于時五月雨閑降郭公雲外過矣 良賢廿一

(花押)

(朱) 同十四酉下許朱點了

(中略)

彼本奥書之本奥書云

保延二年八月五日庚子以中家本移點了

同廿日乙卯見合家本了

東方正清原賴滋

(その他、「江通景之本」「藤原忠長」「(同) 長英」の書寫等の記事がある)

右の古文孝經の四本は、何れも多くは異訓をも持つてをり、その訓讀法が、「ㄨ」のみ使用の清原家學者の書寫加點の古文孝經諸本(前述)に對して、相違した訓法を多く持ち、しかも此の四本間には共通する訓法を認める。識語を見るに、猿投神社藏本と三千院本とは僧侶の移點であり、元徳二年點は清原家以外の諸家の訓法の影響を受けてゐる(元徳二年點のヲト點は紀傳點である)。訓讀法の上からも、清原家の訓説を主として外に他家の説を校合してゐる事が判明する。その中で中原家訓が濃厚に認められるが、元徳點に「以中家本移點了」とあるのはそれを裏付ける。従つて、此等に「ㄨ」が交へて見られるのは、清原家の訓説と、「ㄨ」使用の家の訓説とが交つたからと考へられるのである。

○大東急記念文庫藏和漢朗詠集 卷下 一軸

(奥書) 本云「以菅氏十二代之餘裔 帝王四代之御侍讀大藏卿爲長自點之

本寫之 向後勿添削 云々 菅在判

于時嘉曆第一中秋三五日書之畢 之源

(別筆) 同比移點校合了以家說授千王殿早

藤朝臣(花押)

此は漢籍そのものではないが、漢籍から引用の語句のある事と談語に菅原爲長の加點の記事があるので擧げた。此の資料には濁音符が極めて多いが大部分は「^ト〇」である。しかし稀に、

窓一^ト。前 庭一^ト。前 八。一^ト。字 官一^ト。途

がある。「^ト〇」が極めて多いのは、本の資料が菅原爲長の點であるからそれに引かれたものであらうが、「一^ト」は藤原某の移點校合に際して交つたものであらう。

凡そ、「^ト〇」を用ゐた博士家の點本を、「一^ト」使用の博士家學者が移點する場合、或いはその逆の場合に、濁音符は、元の點本の形式に従ふのが建前であらう。しかし多くの例の中には稀に自家の符號が入る可能性が生ずる。和漢朗詠集嘉曆點はその例を示すものであらう。

しかし、中には、自家の符號に變へるものものる。金澤文庫本群書治要の卷十一から卷十九までの史記・漢書は、南家茂範に誂へて加點した本が焼失したので康有本(茂範の點を寫したもの)で書寫加點したもの、卷二十一から三十までの史部は、日野家俊國・經雄に誂へて加點したもので實時の手に係る。卷三十一から卷五十までの子部は式家敦周・敦綱・敦經の點進本を以て教隆が校點してゐる。その濁音符は全て「^ト〇」である。特に卷十二~三十はヲコト點も紀傳點を用ゐて藤原家の點法であるが、濁音符は藤原家の符號を見ない。

雜一^ト〇^{テウ}糶 黙^ト。然(卷十五) 〇〇糜一減 商旅議^ト〇(卷十七)

(卷十二、十四、十六、十八、十九、廿一、廿二には、濁音符無し)

趙一^ト〇^{テウ}嬢(卷二十三) 任^ト〇(卷二十四) 廟一^ト〇^{ヘウ}勝 議^ト〇〇^{セウ}柄(卷二十五)

適一^ト〇^{テキ}莫^ト〇。 迂^ト〇一視(卷二十七) 繆^ト〇〇^{ヘウ}ヒツ(卷二十九) 劉一毅^ト〇〇^キ 咲一^ト〇^{セウ}

〇〇^ト侮(卷三十)

此は實時・教隆が自家の符號に改めたと考へられるのである。或いは、多種

の漢籍の抜萃といふ群書治要の特殊性によるものかも知れない。

一方、僧侶移點の漢籍では、濁音符に「 $\circ\circ$ 」を用ゐる資料が多い。

○大東急記念文庫藏文集卷四嘉禎點 一軸

嘉禎四年に淨圓蓮勝房の書寫に係り、濁音符は「 $\circ\circ$ 」。

○天理圖書館藏文集卷三永仁點 一軸

永仁元年に金剛壽福寺で朝譽が書寫。濁音符は「 $\circ\circ$ 」。

○國會圖書館藏文集抄 一帖

建長二年に醍醐寺親心院で桑門某が書寫。圓蓮房本で注付す。濁音符は「 $\circ\circ$ 」。

所で、親本に「 \circ 」を用ゐた場合には、「 $\circ\circ$ 」の外に稀に「 \circ 」を交へる。

書陵部藏六臣注文選六十一冊は、應永卅四年等に重志・鼎志等の移點したものであるが、元は式家敦周や中原師直の訓點を傳へる。濁音符は「 $\circ\circ$ 」を用ゐ、又「 \circ 」を交へる。

高山寺藏論語卷四・卷八の嘉元點は、大法師了尊の書寫移點であるが、親本は中原家の秘本である。濁音符は殆ど「 $\circ\circ$ 」であるが稀に「 \circ 」を存する。此等は、元の點本で「 \circ 」を用ゐたものが、移點の際「 $\circ\circ$ 」に改められる折、一部に元の符號も残つたものと考へられるのである。

さすれば、元「 $\circ\circ$ 」を用ゐた點本を僧が移點する場合には「 $\circ\circ$ 」を用ゐるのは當然であらう。前掲の知恩院藏三略は此の例である。

6 無識語資料等の素姓の、濁音符に基く推定

漢籍の訓點資料には、識語を關いたり、或いは加點年月日のみであつたりして、加點者の素姓が不明の資料が多く存する。しかし、此等も、濁音符に基きヲコト點法を参照すれば、その素姓が推測出来るのである。

(一) 菅原家の訓法と推定される資料

○高山寺藏周本紀錄倉初期點 一軸

識語なし。濁音符「 $\circ\circ$ 」のみ。紀傳點。

○山岸徳平博士藏孝景本紀大治二年點 一軸

(奥) 太治二年九月二日申時書寫了 (「太」はもとのまま)

濁音符「oo」のみ。紀傳點。

○梅澤彦太郎氏藏帝範鎌倉後期點

識語なし。濁音符「oo」のみ。紀傳點。

○大念佛寺藏毛詩二南鎌倉期點

識語なし。濁音符「oo」。紀傳點。

○書陵部藏臣軌鎌倉期點 一帖

識語なし。濁音符「oo」。紀傳點。

紀傳點所用で「oo」のみの資料は、博士家學者加點では菅原家である。但し、僧侶の移點に「oo」があるが、菅家以外の家の點本による時は「oo」に「-」が交用されるのが普通であるから、右の資料は表記上から菅家と推測出来る。それは又内容上、訓讀法の面からも證せられる。周本紀及び孝景本紀には、別に式家の訓法を傳へた資料がある。式家の訓法と高山寺藏本及び山岸徳平博士藏本の訓法とを比較すると、大きく相違し、その相違の型は、式家と菅家との相違の型に一致するのである。帝範には式家と菅家との訓法を傳へた資料があり、梅澤本は菅家の訓法に合ふ。大念佛寺藏毛詩は「清(原)」「江(大江)」の注記があるから、此の二家以外の訓法であり、しかも濁音符「oo」からは藤原中原以外となり、菅家の訓と考へる。九條本毛詩第十五第十八二卷に在親・在貫・在豊の菅家の學者の識語がある事が参考になる。書陵部藏臣軌も菅家の訓法に合ふ。

(二) 清原家の訓法と推定される資料

○東洋文庫藏古文孝經延慶點 一帖

(奥) 延慶元年十月廿七日書寫了

濁音符「oo」のみ。明經點。

○斯道文庫藏古文孝經鎌倉期點 一軸

識語なし。濁音符「oo」。明經點。

○書陵部藏論語集解卷三鎌倉後期點 一軸

識語なし。濁音符「oo」。明經點。

○書陵部藏老子至德點 二帖

(奥書) 至德三年五月十二日 主慶秀^{生 年}_{三七歲}

濁音符「〇」。明經點。

明經點所用で「〇」を用ゐるのは、先づ清原家の訓法と考へられる。右の資料を訓讀法から検討するに、古文孝經では、中原家の訓法に合はず、清原家に合ふ。論語も同様である。老子には別に中原家の資料(後述)があるが、それと比較すると、訓讀法が清家の特徴に適ふのである。

(三) 藤原家の訓法と推定される資料

○高山寺藏莊子卷廿六鎌倉期點 一軸

識語なし。濁音符「ㄨ」。紀傳點。

○大東急記念文庫藏文選卷三鎌倉中期點 一軸

識語なし。濁音符「ㄨ」を主とし稀に「〇」を交ふ。紀傳點。

○高山寺藏股本紀建曆元年點 一軸

(奥書) 建曆元年七月十五日受之同日即讀了

濁音符「ㄨ」を主とし「〇」を交ふ。紀傳點。

○東洋文庫藏帝王略論鎌倉後期點 三軸

(卷一奥) 本云文永七年六月廿日以總州菅公氏本書寫點校了

濁音符「ㄨ」を主とし、稀に「〇」。紀傳點。

此等は、その書物の内容と「ㄨ」とを用ゐる事から恐らく藤原家系統のものと推測される。帝王略論は菅家本とされてゐるものであるが、濁音符の上からは疑がある。

(四) 中原家の訓法と推定される資料

○梅澤彦太郎氏藏老子應安點 二帖

(卷下奥) 應安六年癸丑九月廿六日於播州弘山以一筆書兩卷訖 (朱)「同聞
十月十六日比較畢」

桑門(花押)

濁音符「ㄨ」を主とし、「〇」を交ふ。紀傳點系(別に墨の明經點もある)

○東洋文庫藏中唐鎌倉末期點 二軸

正治二年の大江宗光の識語は信ぜられず

濁音符「ㄨ」を主とし「ㄨㄨ」を交ふ。紀傳點系。

梅澤本老子應安點が訓讀法の上から中原家の訓法を主として傳へたものであることは、至徳三年點(清家本)との比較によつて、別に述べた所である。東洋文庫藏中庸も、訓讀法から見て中原家の訓法と考へられる。さすれば此等に濁音符「ㄨ」が用ゐられてゐる事と合つて來るのである。

7 博士家における濁音符使分けの意義

博士家で濁音符を使用し始めた時期は、佛家より遙かに後れる。現存資料によれば院政期以降である。築島裕博士は「總じて、平安時代の博士家點本では、史記延久點を始として、春秋經傳集解保延點(清原頼業加點)、黃帝内經太素仁安點など、何れも濁聲點の例を見ない」とされ、しかし「神田本文集天永四年點にㄨㄨが、多賀切和漢朗詠集(永久四年奥)にㄨㄨㄨㄨを用ゐる例があつて物によつては、天永永久頃からㄨㄨを用ゐたかとも見られる」と言はれる。文集天永點には、後筆(裏書識語の保延の筆か)があつて特に字音の部分に見られ、ㄨも、その一つの「ㄨ」は後筆かと疑はれる。しかし、

孝景本紀大治二年(1127)點(菅原家と推定)ㄨ

九條本文選卷十七保延二年點(1136)〔「菅冠者」の識語あり〕ㄨ及びㄨ

同 文選卷二十承安二年(1172)點(「菅家」の識語)ㄨとㄨ(淡)とを區別す

等があるから、院政期には菅原家と藤原家では用ゐてゐたと見られる。清原頼業の春秋經傳集解保延五年點では、全て單點であるのに、同箇所を、金澤文庫本鎌倉期點では「ㄨ」になつてゐる事から、清原家では、保延頃には未だ濁音符を用ゐなかつたらうと考へられる。

鎌倉時代を経て、室町時代に降ると、博士家間の濁音符の使分けは保たれなくなる。古訓法を忠實に傳へた、清原宣賢の毛詩十帖(大東急記念文庫藏)でも、三條西實隆移點の史記四十三冊(書陵部藏)、同文集卷三卷四二冊(同上藏)でも「ㄨ」と「ㄨ」を交用して何の區別も認められない。

院政鎌倉時代において博士家で「oo」と「o-」とが使分けられた意義は何であらうか。一體、佛家では此の符號は「遅くとも十一世紀中頃から、特に濁音を示す符號として、oo・・及び・o→・・o-△などが使用されるやうになつた」^⑫と言はれる。所でその中の「o-」を用ゐた資料を見るに、

大東急記念文庫藏金剛界儀軌長保六年又は延久二年點 (築島裕博士「注12」論文)

西大寺藏護摩密記長元八年(1035)點 [寶幢院點] (同右)

東大國語研究室藏惠果和上之碑文長曆天喜頃點 [第五群點] (同右)

早稲田大學藏金剛界私記康平六年點(1063) [仁都波迦點] (同右)

曼殊院藏毗沙門天法寛治三年點(1089) [仁都波迦點]

同 佛母曼拏羅念誦要法康和二年點 [同]

書陵部藏大乘本生心地觀經院政末期點 [第五群點]

天台宗関係か第五群點の資料で、共に點法上博士家と関係のあるものである。恐らく藤原家の濁音符は、佛家の右の様な所から學んで「o-」を用ゐ、「oo」を用ゐた菅原家と對立した符號を採用したのであらう。明經道においては、清原家が、菅家にやや遅れて同じく「oo」を採用したのに對して、中原家は、藤原家所用の「o-」を採用したのであらう。かくて、紀傳・明經各道において、各家が濁音符の面でも對立意識を表はした結果、使分けが生じたと思ふのである。

(昭和40年9月20日稿)

[注]

- ① 拙稿「神田本白氏文集の訓の類別」(國語と國文學昭和三十八年一月號)
- 同 「金澤文庫本群書治要卷四十所収三略の訓點について」(田山方南華甲記念論文集) 昭和三十八年十月
- 同 「大江家の訓法の特徴」(國語と國文學 昭和三十九年十月號)
- 同 「老子經の古訓法」(漢文教室六十九號) 昭和三十九年十月
- ② 吉澤義則博士「本邦音符考」(『國語國文の研究』所収)
- 同 「濁點源流考」(『國語說鈴』所収)
- 橋本進吉博士「音符」(日本文學大辭典の中)
- 星加宗一氏「濁點の成立について」(『國語と國文學 昭和七年十二月號)

春日政治博士「高野山にて觀たる古點本一二」(『古訓點の研究』所収)

同 『假名の沿革』(國語文化講座)

築島裕博士「濁點の起源」(「東京大學人文科學科紀要第三十二輯」昭和三十九年四月)

- ③ 拙稿「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信證古點」(「東洋大學大學院紀要第二集」昭和四十年九月)
- ④ 拙稿「神田本白氏文集の訓の類別」(前出)
- ⑤ 時賢書寫本文集に載せられた黄筆の大江家訓は、大江家點本から濟氏が直接移點したもののか、或いは藤原正家の日野流の點本に併記されてあつたものを濟氏が校合の際に色分けして轉記したものか不明である。後者だとすれば、正家が大江家の訓説を併記する際に濁音符の形式を自家の形式に改めたと考へる餘地があるから、「〇」を直ちに大江家使用と斷ずる事が出来ない。前者の場合には、濟氏が、移點に際して菅原家と日野流とを嚴格に區別してゐる態度から推して大江家の所用形式を忠實に傳へたものと考へられる。
- ⑥ 此の論語には十帖各冊にわたつて、室町末期と見られる加筆がある。此の加筆は中原家や朱子新註の訓法も存し全く別のものであるので本稿では一切採らない。(拙稿「論語訓讀史上における論語建武點」(かがみ豫定) 参照)
- ⑦ 坂本良太郎氏「中原康富の學問」文化第十ノ十一 中田祝夫博士『古點本の國語學的 研究總論篇』四五六頁
- ⑧ 拙稿「大江家の訓法の特徴」(前出)
- ⑨ 此等の資料の訓法の系統を、訓讀法の上から、諸本を比較し検討した結果、實證される。本稿ではそれを省略した。清原家以下についても同様である。その一部については既に發表したが、殘るものも別に發表する豫定であるから、それに譲る。
- ⑩ 拙稿「老子經の古訓法」(前出)
- ⑪ 〃 「大江家の訓法の特徴」(前出)
- ⑫ 築島裕博士「濁點の起源」(前出) 二九七頁
- [附記] 本稿に用ゐた資料の識語については、その都度全文を掲げるべきであるが、都合上、一部又は全部を省いた。その全文については、「漢籍訓點本與書集及び博士家關係者人名索引」(豫定) に譲つた。

(國語學國文學助教授)

Sign for voiced sounds used in the "kotenbon"
of chinese texts

Yoshinori Kobayashi

In the Heian and Kamakura periods, the reading of the chinese texts was treated exclusively by the families of professional scholars, named "Hakaseke".

Among Hakasekes, we reckon the Ōes, the Sugawaras, and the Fujiwaras that were concerned in Kidendō (紀傳道), the Kiyowaras and the Nakaharas that were concerned in Myōgyōdō (明經道).

Each of these families read the Chinese texts in its own way. Therefore there existed some differences in the Japanese ways of reading the chinese texts among them.

I have already testified this fact in my other papers on the basis of the language which was used in those days for "Kotenbon", the Japanese reading of the Chinese texts.

This paper also aims to testify the same fact, in connection with "dakuonpu", that is, a sign for voiced sound.

The signs for voiced-sound which were used in "Kotenbon" are as follows:

- ◌- was used by the Ōes and the Fujiwaras of Kidendō,
- ◌◌ was used by the Sugawaras of Kidendō,
- ◌- was used by the Nakaharas of Myōgyōdō,
- ◌◌ was used by the Kiyowaras of Myōgyōdō.

If we apply this knowledge to the texts, we shall be able to decide which of these families was concerned in the reading of them, even when the name of the scholar has not been known yet.